

大原野の緑釉陶器生産

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

京都盆地の西南部、山城と丹波との境に標高 639 m の小塩山^{おしお}があります。この山麓で採れる粘土は良質の陶土となることから、奈良時代から平安時代にかけて焼き物の製作所がつくられました。ここにある多くの窯跡を、大原野窯跡群と呼んでいます。

平安時代の緑釉陶器の主な生産地は、平安京周辺のほか、滋賀県や東海地方の愛知県・岐阜県などにあります。平安京周辺の生産地では、洛北^{はたえだ}の幡枝と、洛西の大原野、大原野から小塩山を越えた亀岡市^{しの}篠などが知られています。大原野窯跡群では窯跡を数多く確認しており、一大窯業生産地だったことがわかりました。

大原野窯跡群で焼き物の生産が始まったのは奈良時代で、大原野南春日あたりで須恵器を作っていました。その後、南側の石作^{いしづくり}・小塩に活動の中心を移し、平安時代前期に緑釉陶器の生産が開始されると、急速に発展していきます。石作・小塩では、これまでの調査で 20 基近い窯跡が発見されています。窯跡は斜面にトンネル状に築いた^{あながま}管窯と、一辺 1 m 程度の小型で三角形の^{ひらがま}平窯があります。管窯では須恵器や釉薬をかける前の緑釉陶器の素地を焼き、平窯では釉薬をかけた素地を焼いて緑釉陶器に仕上げます。



西上空からみた大原野窯跡群

中央の谷を中心にして山裾のなだらかな斜面に窯が営まれた。手前は善峰寺。遠くには平安京跡のある市街地が広がる。



平安京跡から出土した大原野産の緑釉陶器

これらの窯跡で焼かれていた焼き物は、大半が緑釉陶器です。須恵器のような硬質のもの、土師器のような軟質のものがありますが、いずれもきめの細かい陶土を用いています。製品には、碗・皿・耳皿・蓋・唾壺・手付瓶・香炉など多彩なものがありますが、なかでも碗・皿が多くを占めます。碗・皿の内面には、花や雲などの文様をヘラで描いたものもみられますが、簡略化し文様の構成もくずれています。また釉薬をかけた後の2度目の焼成ではトチン（製品ど

うし）を使用することが少なく、直接重ねて焼いています。このことから製造方法が粗雑になっているといえるでしょう。

この他、窯の中で使う窯道具が出土しています。トチン・サヤ鉢（窯の中で製品を保護するための容器）・焼き台（製品をまっすぐに据える道具）などがあります。

大原野窯跡群の製品は、西日本一帯からわずかながら東北地方にまでおよんでおり、広範囲に供給されていたことが知られています。しかし、出土量は平安京が最も多く、平安京を中心に供給したもの

といえるでしょう。

平安京周辺の緑釉陶器の生産地のうち、最も早く操業を始めるのは洛北地区です。次いで9世紀後半から10世紀にかけて、緑釉陶器の需要が増えるとともに、ここでもみたと同様に大原野で大量生産が行なわれるようになりました。しかし、10世紀後半には製品は粗悪化し、大原野の窯はその火を消してしまいます。やがて、緑釉陶器は、中国製陶磁器の大量輸入などの影響で、11世紀の終わり頃には平安京では、ほとんどみられなくなってしまうのです。



窯跡から出土した遺物 トチン・焼き台・サヤ鉢・緑釉陶器の破片。